

英語教師は電子教室の夢を見るか？

— CAI と英語授業をめぐる報告と展望 —

松村 伸一

キーワード：英語教育，コンピュータ，英作文

「新しいイデオロギーの用意はできたか？」 フィル・レッシュ

一 はじめに

文部省による「特色ある教育」および情報教育設備への補助助成政策を背景に、近年多くの大学短大で、従来のランゲージ・ラボラトリ(以下LL)にコンピュータ・ネットワークを組み合わせたcomputer-assisted instruction(以下CAI)型施設が導入されている¹⁾。本学もその例に洩れず、旧来のLLシステムのリース契約更新を機会に、マルチメディア・ランゲージ・ラボラトリ(以下MLL)一室が96年度より導入された。

私は96、97年度の2年間、「英作文」の授業でこの施設を利用した。私自身のコンピュータに関する知識は、ごく一般的なワープロ・表計算などの応用ソフト・ユーザの域を出るものではないが、導入検討にあたり、武蔵工業大学の類似設備を見学にうかがったり、業者のデモ施設(ソニー・メディアワールド)で説明を受けたりする過程で、英語教育にコンピュータ機器を使用することの可能性に興味を抱くようになり、MLLの使用を強く希望して教務関係者に受け入れていただいた。98年度からは講義科目と引き換えに英作文の担当をはずれたため授業では使用していないが、LL事務室と英文学科との連絡係のような役目を引き受けた関係もあり、引き続き関心を寄せている。本稿では、1)この設備を使用した授業に関する事例報告を行なったのち、2)英語教育、特に英作文教育の意義を批評的に再考しつつ、そこにおけるコンピュータ利用の今後を展望し、あわせて将来同様の授業を実践する際に役立つと思われる若干のアイデア提供を行ないたい。なお、LL教室に関する知識の少ない読者にも読んでいただけるよう簡単に用語説明を添えている。不要な向きには煩わしく、必要な方にはわかりにくい面もあるだろうが、便宜的な措置として諒としていただければ幸いである。

二 事例報告

1) MLL教室のシステム構成

大まかに言うと、従来型LL関連機材からなるアナログ系統と、ネットワーク化されたコンピュータ・システムのデジタル系統との二系統で構成されている。旧来型LL系統については

特記すべき事項はないので、ここでは特にコンピュータ系統の構成を紹介しておく。

MLL室内には学生用としてApple社のPower Mac 7500 (OS: System 7.5; CPU: Power PC601 (100MHz); Memory: 16MB)が30台、教師用としてPower Mac 9500 (OS: System 7.5; CPU: PC604 (120MHz); Memory: 16MB)が1台設置され、隣室の自習室には自習用コンピュータ (MLL学生用コンピュータと同じ仕様) 2台およびソニーのNEWSサーバが置かれている。MLLのローカル・ネットワークはApple Talkを使用し、基幹部分にイーサ・スイッチ (10Mbps/100Mbps) 1台を配置している。その各ポートには、NEWSサーバ、教師用パソコン、および学生用パソコン4

台を結ぶHub 8基 (ただし、内1基は学生用パソコン2台を結ぶ) が直結されている。このMLLローカル・ネットワークは、イーサ・スイッチを介して短大LANに接続され、さらに青山学院大学LANからインターネットにつながっている。(図1)

周辺機器としては、学生用パソコン2台につきエプソン社のインクジェット・プリンタ1台が物理的に接続されているが、すべてネットワーク化されているためセレクトから選択すれば別卓のプリンタを使用することもできる。教師用パソコンにはレーザー・プリンタ、カラー・インクジェット・プリンタのほか、スキャナーとMOドライブが接続されており、このうちプリンタ2台はやはり学生用パソコンからも使用可能である。

応用ソフトとしては、Microsoft社のWord (文書作成)、Excel (表計算)、PowerPoint (プレゼンテーション資料作成)、およびNetscape社のNetscape Navigator (インターネットのワールド・ワイド・ウェブ (以下WWW) ブラウザ) といったごく標準的なものが教師用学生用双方のパソコンにあらかじめインストールされている。

また教卓に1台、学生卓のコンピュータ・ディスプレイ2台の間にも1台ずつ、教材示範用

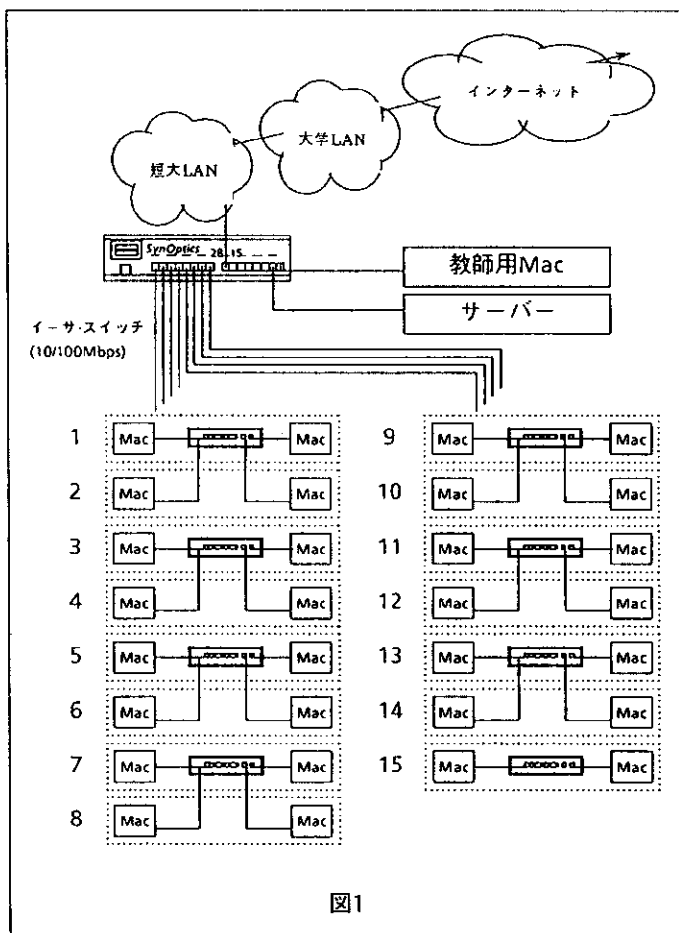


図1

のディスプレイが置かれている。これには教師用パソコンの画面や学生用パソコン1台の画面などデジタルシステムの映像と、ビデオやプロジェクター(OHPに似ているが透過型でなく反射型のもの)などアナログシステムの視覚機器すべての画面の双方を映すことができる。さらにはLLのモニタリング(「検聴」)。学生が音声教材を用いて練習している音を教師が遠隔的に聴取し、必要があれば通話をオンにして指示を与えることもできる機能)と同じように学生のパソコン画面を1台ずつ巡覧し、またそれをモデルとして他の学生に示すことも可能である。その意味では、この示範用ディスプレイにおいてはアナログシステムとデジタルシステムが融合されていると言えるだろう。実際、使用感の良い機能であり、後に触れる通り大いに活用した。

2)科目

「英作文」の授業で上記のような教室を利用することにした。本学では「英作文」は一年次の必修科目として設置され、週一回日本人教員が担当することになっている。学生数は30人程度で、一クラス(約60人)を1/2に分けたハーフサイズ・クラスである。

この科目でのコンピュータ使用を選んだのは、①MLLの座席数が上記の通り30と決まっていたので、それ以下の人数の科目でしか使用できなかったこと、②なるべく毎回コンピュータを使う作業(当初より想定していたのはワープロとインターネット)を盛り込みやすかったこと、③旧来型のLLが学生の音声言語訓練を支援する方式との類推で、学生の文字言語訓練を支援する授業形態をイメージしやすかったこと、が大きな点として挙げられる。

3)授業の流れ

テキストとしては『地球時代の英語ライティング』(金星堂)を使用した。「占い」「結婚」などや女子学生を意識した観のあるtopicごとにユニットが構成され、計15ユニットのほか、補足ユニットが3つ付いている。各ユニットは、基本語句、書取練習(ディクテーション)、書取練習の英文を利用した作文、さらにさまざまな形式の応用問題に続いてパラグラフ構成練習へと展開していく。最近の英作文の教科書にはよく見られる構成であり、問題などの要求学力水準もやや易しめであろう。ディクテーションは付属のカセットテープを流すだけなので、LLなど特殊な機材を使用することを前提として構成された教科書では、全くない。

このようなテキストを用意した主な理由は、一コマの授業で二つの作業を並行して行なおうとしたことにある。毎週の授業時間のなかで、まず前半(60分弱)では、旧来通りテキストに沿った英作文の作業(コンピュータは英文入力のための補助手段として位置づけられる)を行ない、残りの時間(2~30分)にコンピュータを使わなければならない作業(インターネット、特にWWWによる情報収集と電子メール)を行なおうという授業設計を準備段階で構想したのである。もう少し正直に告白すれば、テキストなしで、たとえばWWW上のホームページ等から一年間適切な教材を学生に供給しつづけることができるかどうか、不安を感じたのであった。「英作文」と銘打った科目である以上、単にパソコンをいじって面白かったというだけに終わっては困ると考えたわけである。

年間の授業の流れとしては、①コンピュータの仕組みの説明、②タイピング練習、③ワープロ・ソフト、④サーバからのファイル転送(教材配布と、ネットワークを実感させることの二つを目的とする)、⑤お絵描きソフト、⑥WWWブラウザによる情報収集、⑦電子メール、といった順序で学生をコンピュータ操作になじませる一方、それと並行してテキストを進めることを予定した。また、たとえば地図の説明をする単位では、描画ソフトで地図を自作し、それをもとに英作文するなど、コンピュータ操作とテキストとを有機的に関連付けることを漠然とではあるが考えていた。

4)実際に起きたトラブル数例

MLL導入初年度は、授業後にほぼ毎回15分位の時間を割いて授業日誌をつけた。自分の研究室のパソコン上に“MLL日誌.txt”というテキスト文書を作成して、そこに授業進度やトラブルの経緯などを毎回短く書き込んだだけのごく簡単なものである。ただし新しいことを始める場合、特に機器使用のような反復性の高い作業を新たに始める場合には、何らかの形で「日誌」をつけておくと後で役に立つことが多い。少なくとも私の場合には、当日発生したトラブルの原因などを授業後にもう一度反芻することによって、機器の理解が次第に深まり、起こりうるトラブルのパターンもおおよそ把握できるようになったので、MLL教室で授業を行なう一助となった。

とはいえ、改めて導入当初の日誌を読むと、まさにパニックそのものである。何か一つ作業を導入しようと試みるたびに、失敗に見舞われていたようだ。以下日誌をもとに、実際に起こったトラブル数例を再現してみる。

- ① 当初コンピュータ・ネットワーク構成に関する理解不足から、教師用パソコンをサーバとして使用し、そこに適当に作成したフォルダから課題作文(数人の学生が書いた英文をまとめたテキスト文書。これをクラスで添削させようとした)を取得させようとしたところ、十数名がサーバに接続した段階で、他の学生は接続できなくなってしまった。この時点で教室は混乱。LL事務室の副手をインターフォンで呼び、見てもらうが解決しない。次回の授業までに副手が業者に連絡をとって判明したことだが、このとき使用していたApple Shareは少なくとも当時のMLLの仕様では接続クライアント数に制限があったようだ。今後はNEWSサーバにファイルを置くことで解決するはず、とのことであった。
- ② 次の授業時には、全員NEWSサーバに接続成功。しかしその中の指定フォルダを開いてファイルを取得させようとしたところ、突然エラーが発生。続けてのトラブルだったので、ここは諦めてテキストのほうを進めることにした。並行して学生のパソコン画面をモニターしたところ、直接サーバ上の文書ファイルを開く動作をしてしまった者がいることに気づき、この学生のパソコンを遠隔操作して終了させた。その後、文書ファイルをいったん各自のパソコンの指定フォルダに保存するよう指示して解決した。(日誌の日付を見ると、上記2件は6月上旬の出来事である。コンピュータをさわり始めて二ヶ月足らずの学生にネットワークを経験させること自体に無理があった。)

- ③ いよいよ課題作文の添削を行なわせようとしたところ、教師自身がアンダーラインの引き方、表示色の変え方などがわからず指示を出せなかったため諦めた。この程度の問題は次回の授業までには解決するが、こうした細かい中断が円滑な授業運営に支障を来すことは言うまでもない。（授業者は普段Windowsを使用していたため、Macアプリの操作でつまずく場面が多々あった。ただ、学生たちはまことに暖かく、かどうかは定かでないが、見守ってくれていた。また、ワープロとしては始めにSimple Textを使い、結局一年間使用しつづけた。Microsoft Wordは、起動するとツールバーがウィンドウの上部1/3ほどを占めてしまい、肝心の英文が見辛かったためである。ツールバー非表示を設定させることは避けたほうがよいと判断した。）
- ④ 7月上旬になって初めて文章をプリントアウトさせることにする。ところがごく普通に「ファイル」メニューから「プリント」を選択させたところエラー続出。あわててLL事務室の副手と呼んだところ、すべてのプリンタをネットワーク上から使う形になっているため、いったん「Apple」メニューの「セレクトラ」から自分のプリンタを選択して接続する必要があるとのこと。この方法を指示したところ、一部で成功するが、うまくいかないケースも多かった。授業後にプリンタを見て回ったところ、別の学生卓のプリンタに出力されているものが見つかった。プリンタの選択を間違えたものと思われる。（プリンタのような基本的な周辺機器はなるべく簡単に使用できる設定になっていることが望ましいだろう。実際、基本機器であるがゆえに、トラブルの数も多かった。たとえば、その後も、接続を間違えたままプリントされていないと思い、別卓のプリンタに何枚も同じ文書を印刷してしまったり、プリンタの給紙トレイが金具の爪の下に紙をセットしなくてはならない仕様であったため学生が不用意に紙を置いた場合には始終紙詰まりを起こすなど、トラブルが絶えなかった。結局MLLのプリンタには用紙をセットせず、印刷したい学生は自分で紙を用意することになった。やむを得ない措置であったが、施設利用の趣旨からすれば大いに問題があることは認めざるを得ない。）

授業中の混乱は以上にとどまらないが、①パソコンを本格的に使用し始める6月から7月にかけてトラブルが発生しやすい、②学生も教師もよく把握していないネットワーク関連でトラブルが起こりやすく、また対応も難しい、という二点は短い経験からも感じたことである。10月初めの日誌には、遅まきながら次のように記してある。「最初に2回くらいの時間を割いて、まずパソコンの操作方法を徹底的に教えることが不可欠だったということである。そのためにはMac付属の導入ガイドはさっさと切り上げて、こちらで必要な操作を体系化・マニュアル化したものを学生に指導・配布するという手間を惜しんではいけない。来年度への課題である。」結局、翌年度もこうした準備を怠ってしまったのだが、1年間の経験がまるで役立たなかったわけではなく、97年度はかなりスムーズに予定通り授業を進めることができた。

5) コンピュータ利用が有効であったと思われる点

上記のような問題点はあったものの、英作文の授業でCAIを実践することには以下のような

二つの利点があると感じた。

- ① 学習への動機づけ：たとえ「英語が好き」と言う学生でも、英作文だけは苦手ないし嫌いだ
ある者が少なくないことは、おおかたの英語教師が実感するところではないだろうか。教える
側に立つ私自身も、準備や添削に苦勞が多い割になかなか効果が目に見えず、悩みの多い科
目であった。それがMLLを利用することで、多くの学生がこの授業時間に覚える忌避感をか
なり減らすことができた。大半の学生は、コンピュータの操作に興味を抱き、覚えるのも早
かった。Netscape Navigatorの利用法を教えたあとは、授業前からMLL教室でホームページ
(主に芸能、ショッピング、占いといったジャンルのサイトであることは、ご想像の通りで
あるが)を楽しむ学生の姿も目に付いたし、やがて授業中の課題もそこそこにインターネット
やKid Pixというお絵描きソフトで遊ぶ学生も出てきた。これはコンピュータ操作に慣れた証
拠として大いに歓迎することにした。

ただし、コンピュータという教育手段によって学生の関心を惹くことには、善悪両面があ
るだろう。作文能力の向上と直接結びつくわけでもない。

- ② 個別指導：前にも触れたモニタリングの機能を使うことによって、英作文指導はほとんど個
別的に行なうことができた。具体的には、授業中に一定時間を割いてテキストの作文問題
を書かせ、その間に学生一人一人の作業をチェックしていき、顕著な誤りがある場合には
「ロック」(学生側パソコンの入力を、学生の手元のキーボードおよびマウスから、一時的に
教員側パソコンのそれに移す機能)をかけて、添削(誤りのある箇所にアンダーラインを施
し、その後ろにカッコに括って訂正案を示す、等。もちろん並行して口頭で説明を加えなが
らである)を行なっていく。「モデル」機能(ある学生のコンピュータ画面を示範用ディス
プレイに表示して教室全体に示す)を使用することで、こうした添削の過程をすべての学生
に示すことができたのも効果があった。

一般教室で英作文の授業を行なう場合、たとえば適当な用紙に「答え」を書かせて回収し、
それに朱書きを入れて返却するというプロセスを経なければならない。が、これには相当な
手間がかかる割に、学生が添削結果を効果的に利用しない場合が多々あると推測される。そ
れに比べて、上記のようなMLL教室の作業は、学生が書いた英文にリアルタイムで指導を
与えることができるので、添削に対する学生の反応の度合いは格段に高かった。唯一留意
すべきなのは、あまり細かい訂正を加えていると、他の学生を見る時間が足りなくなるのみな
らず、学生の作文意欲を減じる結果にもなりかねない点であろう。

三 英語教育におけるコンピュータ利用に関わる問題点と展望

以上のようにほとんど無手勝流にCAIの真似事を実践するかたわら、「大学における授業方法
研究」プロジェクトが発足した。特にそのメンバーで情報処理が専門の宮田から学会報を見せ
ていただくなどして、他校におけるCAI実践例を知ることができたことは私にとってたいへん
有益であった(こうした教員相互の情報交換の重要性を強調するために敢えて特記しておく)。

本節ではそうして知り得た先行例、先行研究などを視野に収めつつ、まず「英語教育」殊に英作文教育の抱える問題と、コンピュータとは教師にとっていかなるきかいかについて考察した後、英語教育においてCAIを行なう際に留意したいことを整理しておく。

1) 英語教育、英作文教育の抱える問題

本プロジェクトの進行と並行して本学では共通教育科目(いわゆる一般教育)の外国語教育カリキュラム改革が進められ、来る1999年度から新カリキュラムが始まる。この改革を進めるなかで、本学の全専任教員向けに「外国語教育フォーラム」という小さなパンフレットが3回発行された。これは本プロジェクトのメンバーでもある清水が、一般教育科目所属の教務担当者であることから企画運営した小冊子であり、そのなかでさまざまな学科の教員がそれぞれ自由な立場から外国語カリキュラム改革案をめぐる考えを披露し、議論が交わされた。園議論のなかで一つのモチーフのように表われたのが、＜実用か、教養か＞という二者択一の問題であった。英語教育に感心のある向きであれば、1974—5年に平泉渉・渡辺昇一両氏の間で交わされた論争²⁾に思い当たることであろう。つまるところ、なぜ学生に外国語を学ばせるのかという一見単純そうな問題は、教員スタッフの間ですらなかなか意見の一致を見るものではないということである。

さらに問題を絞ると、「英作文」(ないしそれにあたる科目)とはいったい何をめざす科目なのだろうか。個人的には、①英語の統辞法を学習すること(これは多少複雑な英文を読む時に役立つ)、②パラグラフ構成法を学習すること(これはレポートなど、論理的な骨組みを意識した日本語の文章を書く時に役立つ)、③いつか将来英語で文章を書く必要が生じた場合の基礎力を養成すること(就職後にビジネス用の英文レターを書く場合や、理系の学生が英語で論文を書く場合を想定。こうした英語英文には雛型がある場合が多いので、特殊な書式や用語法は必要に応じて独学することになるが、その独学を可能にする基礎力を身につけておかねばならない)、の3つを目標とすることが多い。しかし、これはまさに「英作文」という科目を担当することになった教員の「個人的」でpragmaticな目標の域を出るものでなく、理論的ないし公的な位置付けや指針の裏付けを持つものでもない。

では、たとえば米国などの国語教育における「作文composition」を範とすることができるだろうか。米国の大学で「作文」が一つの専門分野として確立されるのは1960年代のことである³⁾。構造主義以降の批評理論に関する

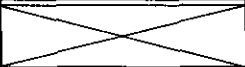
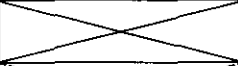
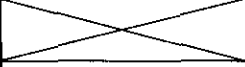
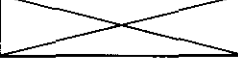
PRODUCTION	TEXTS	CONSUMPTION
	literature	interpretation
creative writing	pseudo-literature	
	non-literature	reading
composition	pseudo-non-literature	

図2

著書で知られるロバート・スコールズは米国の大学における言語表現関連科目のカリキュラム構成を図2のように分析している⁴⁾。テキストは文学科非-文学かで分類されており、前者が上位に位置する。さらにテキスト消費とテキスト生産という二つの言語教育実践の様態は、消費が上位を占める形で階層化され、大学内で生産されるテキストは現実世界で生産されるテキストに対して「擬似的」性質を刻印される。かくして、〈文学＝解釈〉〈擬似-文学＝創作〉、〈非-文学＝読解〉、〈擬似-非-文学＝作文〉というヒエラルキーが成立するわけだ。作文および作文教師はその最底辺に位置するわけである。むろんスコールズはこのヒエラルキーを是認するためではなく、批判的に分析するために取り上げているのであり、〈文学／非-文学〉、〈生産／消費〉、〈現実世界／大学〉というキーとなる二項対立を次々に〈脱構築〉してみせる。しかしながら、では具体的にどのような指針を立てて作文教育に臨めばよいかという段になると、歯切れの悪さは否めない⁵⁾。また、日本の大学短大に話を移せば、そこで履修される「英作文」は、いわばこの図表全体が〈英語〉の範疇に入るのに対して、〈擬似-英語〉の烙印を押されることになろう。この二項対立をどのようにして解体構築するかはわれわれ日本人英語教師の課題である。日本の大学短大で「英作文」の科目を設置し、学生たちに「擬似-英語」の文章を生産させることにどんな意味があるのか、いったんは問うてみる必要がある所以である。

「第一言語としての英語」(English as a first language)や「第二言語としての英語」(English as a second language)における作文教育では、特に1970年代以降、結果志向(product-oriented approach)から過程志向(process-oriented approach)への流れが明確に見られる⁶⁾。ごく簡単に言うなら、学生が書き上げた文章をどのように処理するかよりも、どのようにして学生は文章を書き上げていくか(もしくは、学生に書き上げさせるべきか)を主な関心の対象とするに至っている。過程志向の英作文教育においては、「計画planning—翻訳translation(ここでは観念を言語に移す認知過程を指す)—推敲reviewing」というプロセスを仮説として措定し、それぞれの段階において「句読点、用語法、正しい言葉づかい」といった「より低いレベルの特徴」から「内容や文章構成」のような全体的な視点へと学生の着眼点を高めていくことが目標となる。上村妙子氏の調査研究によれば、日本人学生が英作文の課題として論理的な文章を書くことを求められた時のふるまいには、以下のような特徴が挙げられたと言う。①書き始める前に考えをめぐらすが、大半の学生はアウトラインを作成するなどの具体的な創案戦略をとらずに考えを生み出そうとした、②日本語から英語への翻訳という戦略に訴えがちで、いいたい日本語文に対応する英語を選ぶことに苦慮した、③明晰な構成法を念頭におかず書き始めた、④いったん書き終えた文章を再読し、推敲することを必要と感じなかった、⑤学生が最も関心を寄せるテキスト上の特性は、語彙と文法であった。また作文技術の高い学生と低い学生とでは次のような相違があったと言う。⑥未熟な学生ほど、書き始める前に、構成法に過度な関心を寄せた、⑦未熟な学生は思いついたことを何でも書く傾向があった、⑧熟練度の低い学生ほど、書いている途中に、つまづきを覚えた、⑨熟練した学生が自分の文章を読み直し、推敲しようとしたのに対し、未熟な学生はそうした作業に見向きもしなかった、⑩未熟な学生ほど課題を難しいと感じた。そして、このうちの①④⑥⑧⑨のような特徴を持つ学生に対しては、過程中心的アプ

ローチで指導することが有効であり、③や⑦のようなふるまいを示す学生に向けては結果志向的アプローチが有効である、と結論づけている⁷⁾。こうした日本人学生のふるまいは、全体として、添削を主な教育手段とする高校までの英作文の授業方法をあからさまに反映していると言える。

2) コンピュータとは教師にとっていかなる機械か

パーソナル・コンピュータの機能向上に伴い、コンピュータのイメージも大きく変わってきた。パソコンに限って言っても、ワープロや表計算、データベースなどの応用ソフトを使用する、ビジネス文書作成支援のための機械から、画像や音声を扱う自己表現・個人記録の道具へ、さらには近年のインターネット環境の普及に伴う形で、電子メールを利用するためのコミュニケーション・ツールへと急速に変貌を遂げつつある。

機械としてのコンピュータの特徴は汎用性とメディア性にある。汎用的、つまりさまざまな作業をさせることが可能なの——目的に合ったソフトウェアさえあれば。逆に言えば、適当なソフトウェアがない場合にはその作業を行なうことができない。ソフトウェアが「ない」事情としては、開発者がいないため存在しない場合、ソフトは存在するが情報不足でそれを知り得ない場合、ソフトが存在することは知っているがたとえば経済的な理由などで手に入れることができない場合、などが考えられる。換言すれば、自ら必要なソフトウェアを開発することが可能な場合を除いて、授業者のコントロール外に属する要因がきわめて大きい、ということである。

また、ここで言うメディア性とは、コンピュータ自体は何らかの作業をさせるための道具であるということである。「させる」という点が重要であり、使用者はコンピュータとメッセージの交換をしなければ目的を達成できない⁸⁾。ワープロのような一般的なアプリケーションを使用する場合を考えても、文書を保存する時に、上書き保存にするか、新規に保存するか、新規の場合どんな文書名にするか等々、相当な量の情報交換が発生する。しかしこうしたコンピュータのインターフェイスそれ自体は単に習熟すべきスキルであり、知的な内容を含む授業素材とはなり得ない。たとえて言えば、授業でどんなアプリケーション・ソフトを使うかということは、どんな教科書を選択するかとは全く次元の異なる問題なのである。むしろ、使用していることを意識させない透明なメディアとなることが本来の姿であろう。

さて、コミュニケーション・ツールとしてパソコンを位置づける場合、その特徴はどこにあるだろうか。コミュニケーションの形態は同期的(synchronous)なもの(対面しての会話、電話など)と非同期的(asynchronous)なもの(手紙、ファックスなど)に分類可能であるが、コンピュータによるコミュニケーションはその双方の種類がある。同期的コミュニケーションとしては「チャット」(音声の代わりに文字を用いて言葉のやり取りを行なう「電話」のような機能)があり、非同期的な様態としては電子メールや電子会議、電子掲示板などが挙げられるが、後者のほうがより使用する機会が多いはずである。

実は、私が英語教育におけるコンピュータ利用に関して希望を抱いている点は、非同期的コ

コミュニケーション・ツールとして用いるというほとんどこの一点に尽きる。電子メールを英作文などの授業に取り入れる試みは、すでに進行している⁹⁾。また、環境が整えば(というのは、企画運営者のインターネットに関する知識と、ネットワーク管理者の協力が必要になるからだ)が、今後は電子会議室を授業で利用してみるのも有効だろう¹⁰⁾。電子会議室では、個々の参加者が発言の登録を行なう。発言には、発言者・発言日時・発言タイトルなどの情報が明示される。発言は原則として公開で、誰でもそれを読むことができる。また、発言に対してはコメントを添えることができ、「スレッド」と呼ばれるツリー状の系列を成すので、論点が整理しやすく論争的な環境を生み出しやすい。また文字として記録に残るので、後で議論の軌跡をたどり直すなど、口頭の議論では難しいことが可能になる。英作文の授業ばかりでなく、文学テキストの問題点を論じ合うなどにもたいへん適している。同様の機能を持つ仕組みとしては、メーリング・リストやニュースグループがある。このような非同期的コミュニケーション能力とそれを支える作文能力を養成することは今後いっそう重要性を増していくことであろう。

ただインターネットを活用することに落とし穴がないわけではない。たとえば佐伯胖はインターネット、特にWWWを利用した教育実践が「調べ学習」に陥りやすい危険性を説いている。「わが国の小中学校では、ほとんどすべての教科で、『調べ学習』と呼ばれる学習形態が実践されている。…多くの場合は、子供たちには『仮説』もないし、したがって『検証』もない。自分なりの疑問も発見もない。対立する意見の交換も議論もない。ただクイズ番組でのクイズへの『解答』を求めるように、『これこれについてはどうなっていますか』と問い、『こうなっています』という答えをみつければそれでオシマイという断片的知識の収集だけである。…こういう『お勉強』文化の土壌には、インターネットというのは格好の道具になる。…『だから、何なのだ』『なぜそうなのだ』『ほんとうに(つねに、どこでも)そうだと言えるのか』『もしもそうだとしたら、今のこのわたしはどうでなければならないのか』というディスカッションがあまりにも弱い。」¹¹⁾ 論述力を高めることを目的とする英作文の授業では、WWWを補助的に位置づけることが賢明な判断となるだろう。

3) 英語教育にコンピュータを利用する際の留意点

以上の議論を踏まえて、英語の授業においてコンピュータを利用する際に留意したい点をごく簡単に整理しておこう。

① タスク(課題)中心の授業展開

学生が授業中に課題をこなす形態を取り、教師はその手助けをするという方式がMLLないしLL式教室の設備を生かすことができる(図3¹²⁾)。

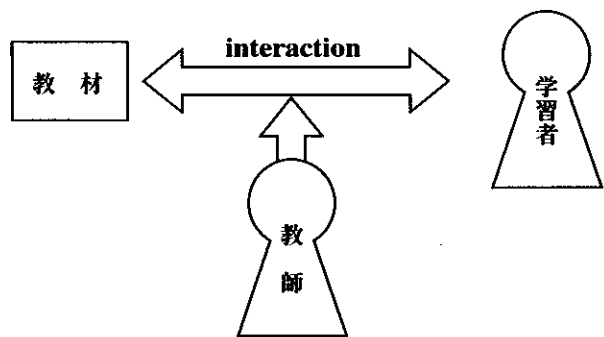


図3

また、個別指導と全体への示範とを同時並行的に行なえる設備を活用する。

② コミュニケーションの道具として

コンピュータ自体は、学生にとってなるべく早く透明な手段となるよう指導する。高機能な応用ソフトの使用法を指導することに時間を割くよりは、ネットワークを生かして、教員と学生、ないし学生同士のコミュニケーション・ツールとして電子メールや電子会議室の形態でメッセージを交換することを促し、学生同士の相互教育効果を高めるほうが望ましい。

③ 規範的姿勢の抑制

充分円滑にコミュニケーションが行われているところへ、些細な点についての指導をさしはさむことを教員は控える。ただし①②の方針を助長する形で学生の表現の「正確さ」(accuracy)を高めることを控える必要はない。

四 むすびに～電子教室の夢？

コンピュータを授業で使用することに学生の多くは関心を示した。これは、コンピュータ操作をある程度覚えることができるという実践的な期待のほかに、一般教室で行なわれる授業に対する一種の異化効果¹³⁾によるところも大きい。一方、英語の授業において学生の関心がコンピュータそのものに集中すること、特にそういう状態が最後まで継続することは避けるよう配慮したい。——すでにこうした出発点からして授業でコンピュータ機器を使用することには矛盾が付きまとう。本稿ではあくまで授業という枠組みの中でコンピュータを用いることを考察してきたが、本来LLやコンピュータ機器は学生が自学自習のために用いることが望ましい。また狭義の学習にとどまらず、たとえば米国の大学のオフィスアワーに相当する活動(修学上の相談など)に電子メールを利用することも有益であろう。電子会議室を活用すれば、教師と学生が週一回教室に集まる授業形態にこだわる必然性も全くなくなってしまう。インターネットがやすやすと国境を越えさせてくれるように、コンピュータはわれわれに教室の壁を越えることを可能にする。そうして出現する仮想的な電子教室が夢の教室であるかどうかはいまだ定かでないが、見慣れない風景をわれわれがすでに見始めていることだけは確かなようだ。

Notes

- 1) 大阪青山短期大学・堀智子氏が実施した「私立短期大学の英語教育におけるコンピュータ利用アンケート調査」(1998年2月24日集計公表。アンケート送付数174、回答数115、回答率66%)によれば、回答のあった短大のうち55%が「英語教育にコンピュータを利用している」と答え、33%は「まだ利用していないが、将来は利用することになると思う」と答えている。ちなみに、「まだ利用していない」短大がその理由として挙げているのは、1位が「設備が整っていない」、2位が「コンピュータに詳しい教員がいない」であり、「今後も利用しない」と答えた短大がその理由として挙げているのは、1位が「コンピュータに詳しい教員がいない」、2位が同数で「設備が整っていない」「利用の必要なし」である。スタッフおよび建築

上の制限がクリアされた場合には、さらに加速度的に広まる可能性が高いものと思われる。

- 2) 平泉・渡部論争に関しては、そのドキュメントである平泉・渡部昇一「英語教育大論争」(1975年、文藝春秋)を参照。この論争は一般には＜実用か、教養か＞の問題としてとらえられているが、改めてその原文にあたると、いっそう複雑な問題系の中で応酬が行なわれていることに気がつく。ただし出発点ははっきりしている。すなわち「現在」の英語教育にまつわる評価である。平泉氏が「その成果は全くあがっていない」と全否定であるのに対し、渡部氏は漢学以来日本の外国語教育が果たしてきた「知的効果」を擁護している。その他の相違点はこの点に端を発していると思われる。

論争から20年を経て大谷泰照氏は、『現代英語教育』1995年11月号(研究社出版)掲載の論文「『平泉・渡部論争』とは何であったのか」において、この論争以降に英米およびEC諸国で進行してきた外国語必修強化の動きを紹介しつつ、「わが国の外国語教育は、たしかに徐々に平泉試案のめざす方向に動いてきたようにみえる。ところが世界の外国語教育の動向は、国際語一辺倒、コミュニケーション一辺倒への反省に立って、全生徒への外国語必修強化、あえていえば渡部説に近い方向に、確実に動きつつあるといえそうである」(29頁)と総括している。しかしながら、「あえていえば」という大谷氏の慎重な言い回しにうかがえるように、両論客の主張を外国語教育における思潮の代表的な二極として扱うことが果たしてどの程度有効であるかは、疑問の多いところである。今日の視点から見ると、一連の論争は「諸君」という保守系論説誌上で展開された「国民教育」論、「天下国家」的英語教育論という枠組みの内部で行われており、①日本近代をめぐる歴史認識、②日本人にとっての英語学習の困難さ、③英語コンプレックスのもたらす文化的・精神的的外傷、といった点で両者は一定の共通認識の上に立っていることのほうが目に付く。また、先に指摘した主要な論争点について言えば、一英語教師としては全否定にも自己肯定にも与しがたい。

とはいえ、このすでに四半世紀を経つつある論争を「われわれは、自分たちと次世代を担う人々が何を学習すべきかについてあまりにも無自覚ではないか」という問いかけとして読み直すなら、その射程はいまだにわれわれを覆っていると言わざるを得まい。

- 3) W. Ross Winterowd, *The English Department: A Personal and Institutional History* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1998), p. 174. 同書は、英米における文学理論と「作文＝修辞」の関連の歴史的展開について、きわめてユニークな視点から個性的な叙述法で論じていて興味深い。
- 4) Robert Scholes, *Textual Power: Literary Theory and the Teaching of English* (New Haven and London: Yale University Press, 1985), p. 7.
- 5) See Scholes, *Textual Power*, Chapter 8, "Is There a Fish in This Text?" (pp. 129-148)
- 6) この段落の内容は、上村妙子氏による以下の論文に全面的に依拠している。Taeko Kamimura, "The Composing Processes of Japanese College EFL Students' Writing and Argumentative Essay," pp. 37-59, *Senshu Journal of Foreign Language Education*, No. 25 (March 1997). [専修大学LL研究室「専修大学外国語教育論集」第25集所収]
- 7) Kamimura, pp. 52-54.
- 8) 佐伯胖「新・コンピュータと教育」(岩波書店、1997年)73-75頁を参照。原文は、鈴木宏昭「機械音痴の背後にあるもの——インタフェースの認知的、文化的基盤」(日本認知科学会「教育環境のデザイン」研究分科会研究報告、Vol. 3, No. 1, 1996)を解説的に紹介した一部分。
- 9) とりわけ創価女子短期大学英語科・南紀子氏の実践は、さまざまな形で公表されている重要な事例である。また、米国の教育環境、ネットワークを前提とした内容ではあるが、マーク・ウォーショー「英語教育のためのE-MAIL」(渡辺雅仁訳、洋販出版、1997年)には参考となる知識やアイデアが多く含まれて

いる。

- 10) インターネットのWWWブラウザ上で「電子会議室」を実現するフリーウェア・ソフトWebLoungeが以下のウェブサイトからダウンロード可能であり、またこれを使用した電子会議室が併設されているので使用例を見することもできる(1998年9月21日現在のアドレスは<http://www.monjunet.ne.jp/WebLounge/>)。このサイトの主な関心は特許翻訳にあり、電子会議室では翻訳の勉強会などが開かれている。ちなみに、商業パソコン通信(BBS)のNifty Serveの翻訳系フォーラム(FTRAN1, FTRAN2, FLITRANなど)でも盛んに勉強会が催されているのは、決して偶然ではないだろう。電子会議室という形態が、こうした学習活動に適合していると見なすことができる。
- 11) 佐伯胖『新・コンピュータと教育』(岩波書店、1997年)147-9頁。
- 12) 浅野博『教育・英語・LL ― 考え方と実践』(リーベル出版、1995年)145頁の概念図をここに借用させていただいた。
- 13) 20世紀初頭ロシア・フォルマリズムの文学理論で唱導された概念。「ある出来事ないしは性格を異化するというのは、簡単にいって、まずその出来事ないしは性格から当然なもの、既知のもの、明白なものを取り去って、それに対する驚きや好奇心をつくりだすことである。」(ベルトルト・ブレヒト『今日の世界は演劇によって再現できるか――ブレヒト演劇論集』千田是也訳編(1962年、白水社)、123頁。)ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトはこの概念を演劇に採り入れたが、彼においては観客に対するその「教育的」影響力が重視されていることを思い出しておきたい。

